

スタインベックとエコロジー

加藤好文

はじめに

北アメリカ大陸の開拓（見方を変えれば自然破壊）は、アメリカ・インディアン（先住民）たちがその地に初めて渡来した時代からはるかに下った17世紀初頭に、ヨーロッパからの移住民たちによって本格的に開始された。未開の荒野の開拓は19世紀の終わりにフロンティアが消滅して一応の終止符が打たれるが、その後もなおアメリカ各地で自然に対する人間の破壊的行為が続いたのである。従って、そのような環境の中から生まれた文学に、アメリカ特有の荒野や自然の有り様が色濃く映し出されていることはある意味で当然かも知れない。例えば、18世紀後半にフランスからアメリカに渡ったクレヴクールの書いた『アメリカ農夫からの手紙』（1782）を手始めとして、19世紀前半のクーパーの諸作品、また19世紀半ばアメリカ文学を世界に知らしめたエマソンやソーロを始めとする「アメリカン・ルネッサンス」期の作家たちや、19世紀後半の国民的作家トウェインの作品など、自然（土地）と人間との関わりをすぐれた筆致で描いた作家、作品は枚挙に暇がない。このような流れは20世紀になっても続き、今回取り上げるジョン・スタインベック（1902-68）も自然を描くことにかけては第一級の作家である。

1920年代半ば頃からやっと作家になるための修行を始めたスタインベックは、当然ながら今世紀の先輩作家たちのスタイルに学ぶところも大きかったであろう。例えば、アンダソンの短編小説作法を始めとして、フィッツジェラルド、ヘミングウェイ、フォークナーなどのモダニズム的作風の洗練を受け、さらに

はキャザーやドライサー、ルイスなどが取り上げた19世紀末から20世紀初頭にかけての開拓村や新興の田舎町の実態描写の方法などの影響を受けたのである。しかしながら自意識の強い後発の彼は、このような文学状況を踏まえた上で、独自の作風を身に付けねばそのような著名な作家たちに伍して一人前の作家として自立することはできなかつたであろうし、また彼の気が収まるはずもなかつた。そこで見出したのが、彼が生まれ育ったカリフォルニアの片田舎の生活をその豊かな自然を活かしながら描くことであり、また地域の自然との触れ合いから育まれた自らのエコロジカルな視点を物語中に取り込むことであったと言える。このような意味からも、環境保護や自然と人間との共生が叫ばれている現在、スタインベックの自然観を総合的に再評価してみるのもあながち無駄なことではあるまい¹⁾。

I 作家としての基本的姿勢

スタインベックの自然描写は、その圧倒的な存在感ゆえに、見方によっては自然界の活動が登場人物の人間らしさを剥奪しているとも映り、批判の対象にされないこともない。例えば、批評界の大御所エドモンド・ウィルソンなどは、「生物学者もどきスタインベックは、動物レベルにある人間や生命のプロセスそれ自体に興味があるのであって、知的存在としての人間にウェイトを置いていない」という趣旨の批判をしたのであった²⁾。確かに、ウィルソンは動物の描写が多いことにいち早く着目し、その視点から30年代の作品論を展開したのはまさに卓見と言わざるを得ない。しかし、自然の世界からその一構成員たる人間の世界を逆照射しようとしたスタインベックの創作意図を、彼が十分に理解していなかったことも否めない。第一次大戦を肌で実感した所謂ロスト・ジェネレーションの作家たちは、戦後の享樂的な時代風潮やその後の世界的な社会不安の中で、人間個人としての苦悩や葛藤をあくまで人間中心にその行動や思考の過程を追いながら描くことに腐心していたのであって、先のウィルソンの発言はこのようなモダニズムの時代を意識したアメリカ東部知識人の限界であっ

たと言えよう。

スタインベックは単に客観的な背景描写としての自然や、人間が征服すべき対象としての自然を一過性のものとして描いたのではない。山々に棲息する動植物や海の生物の生態、自然（現象）の微妙な変化などを観察し、また自然の変貌ぶりを考察することによって、アメリカ「発展」の歴史を自己批判的に検証し、アメリカ人の本質に迫ろうとしたのである。そのために、彼の作品に描かれた自然は人間の行動に影響を与えたり心理状態を暗示する重要なファクターとして機能している場合が多い。従ってこの作家にアプローチする場合は、人間を生態系の一部として捉える複眼的な目を備えていることが必要なのである。

上述した観点からスタインベックを論じる場合、『怒りのぶどう』（1939）を論じたオウエンズの慧眼を凌ぐものではなく、これは個別の作品論の域を超えてこの作家の本質を洞察したものである。

That America had long been a nation of individuals without commitment to one another or, even more importantly, without commitment to the place they inhabit—the entire ecosystem—is very much on Steinbeck's mind in this novel. It is this pattern of disengagement, Steinbeck suggests rather subtly, that has created the westering impulse, that movement which allows for the plundering of the continent in a steady westward migration. It is a historical pattern that pits man against man, family against family in a search for paradise. The sharecroppers, such as the Joads, who are quick to steal another man's home and guard it against recovery, and who readily embrace a history of killing Indians, are firmly fixed in this destructive pattern.³⁾

アメリカの歴史は個々人の「西への衝動」すなわち「楽園探求」の中で築かれたものである。その過程で、彼らは人間同士や人間と場所との関わり、換言すれば生態系全体へのコミットメントを否定し、個人単位あるいは家族単位で眼

前のアメリカ大陸を蹂躪していったのである。そしてこの破壊的パターンが先住民殺戮の歴史も生み出したのである。言うなれば、現在は被害者である移住農民たちも、巨視的に見れば先住民やアメリカの自然（土地）の営みに暴力を振るった加害者なのである。従ってこのようなアメリカの歴史を検証するために、スタインベックは意図的に登場人物たちを一つの場所に定住させず絶えず空間を移動させる方法を用いたのだし、また作家としての自己の立場や一般アメリカ人としての考え方を巧妙に使い分けたのである。彼の作品には表面上の物語の底流に、常に「アメリカとは何か」「アメリカ人とは何か」という普遍的・包括的テーマが追求されていることを忘れてはならないのである。

このオウエンズの主張に依拠しつつ、以下で具体的にスタインベックの個々の作品に当たっていきたい。まず40年代以降のノンフィクションを中心にして、エコロジーを明確に意識した彼のアメリカ観を検証し、次にその流れを30年代のフィクションに溯って辿りながら、自然と登場人物との関わりを考察してみる。そしてその際、特に自然と共存してきた先住民の描写内容にも注目しつつ、人間個人中心のアメリカ、ワズプ中心のアメリカ史を彼なりの方法で脱却しようとしていたことを読み取ってみたい。

II エコロジー的アメリカ観

スタインベックは『コルテスの海』（1941）及びその改訂版として主要部分をそのまま転載した『コルテスの海航海日誌』（1951）の海洋生物採集旅行、さらに『チャーリーとの旅』（1962）や『アメリカとアメリカ人』（1966）などの紀行文やエッセイにおいて、人間を取り巻く自然環境に強い関心を寄せた言葉を残している。特に『コルテスの海』の中で、彼は「人間探求」を究極の目標テーマとしながらも、そのプロセスにおいて海洋生物の観察を通して生き物たちが生存競争を勝ち抜くためにいかに精巧なメカニズムを有しているかに驚嘆し、さらにそのような自然界と人間との深い関わりをエコロジーの観点から洞察している。彼の立場は、一行がカリフォルニア湾（コルテスの海）に入っ

て行くに際しての次の一節で明らかである。

We said, "Let's go wide open. Let's see what we see, record what we find, and not fool ourselves with conventional scientific strictures...Let us go," we said, "into the Sea of Cortez, realizing that we become forever a part of it; that our rubber boots slogging through a flat of eelgrass, that the rocks we turn over in a tide pool, make us truly and permanently a factor in the ecology of the region. We shall take something away from it, but we shall leave something too."⁴⁾

彼は一切の先入観を排除し謙虚な態度で、自らがその地域のエコロジーの一部となって、生物の生態を観察することを宣言したものである。そこに人間の傲慢さは微塵も感じられない。

このようなスタインベックの基本的スタンスは60年代の作品にも受け継がれている。『アメリカとアメリカ人』の中で、晩年のスタインベックがアメリカ開拓の歴史を回想し、その渦中で犠牲となった先住民たちや、また破壊された自然について言及しているところがある。まずは“The Indians survived our open intention of wiping them out, and since the tide turned they have even weathered our good intentions toward them, which can be much more deadly.”⁵⁾と述べて、先住民の歴史を簡潔に要約している。つまりワスプを代表格とするヨーロッパ諸国の人々は「アメリカン・ドリーム」の名のもとに土地所有の夢を抱いて大西洋を渡り、武力と物資の威力をもって、自然と共存しエコロジカルな生活を実践していたとも言える先住民たちを「公然と」殺戮し、また「善意」から居留区に隔離して、様々な自然の障害を乗り越えながら西部開拓の夢を実践したのである。従って、このように肉体的あるいは精神的な死という辛酸を嘗めさせられた先住民の悲劇は、ある意味で自然（荒野）の無秩序な破壊を予示する一つの指標と理解することができる。（しかも、そのような状況を「生き延びた」という作者の一言は忘れてはならないだろう。）

それでは自然そのものについてはどのように発言しているであろうか。これについても、同じく作者は自らをも加害者の末裔に加えた一人称複数形を多用して、アメリカ人の自然破壊を次のように弾劾している。

I have often wondered at the savagery and thoughtlessness with which our early settlers approached this rich continent. They came at it as though it were an enemy, which of course it was. They burned the forests and changed the rainfall; they swept the buffalo from the plains, blasted the streams, set fire to the grass, and ran a reckless scythe through the virgin and noble timber.... This tendency toward irresponsibility persists in very many of us today; our rivers are poisoned by reckless dumping of sewage and toxic industrial wastes, the air of our cities is filthy and dangerous to breathe from the belching of uncontrolled products from combustion of coal, coke, oil, and gasoline. Our towns are girdled with wreckage and the debris of our toys—our automobiles and our packaged pleasures. Through uninhibited spraying against one enemy we have destroyed the natural balances our survival requires.⁶⁾

開拓初期のアメリカは移住民たちにとっては征服すべき“enemy”だったのである。かつての自然破壊はこの60年代の環境汚染と同様に度を越したものであり、いずれにしろ無自覚的に自然界のバランスを壊してきたアメリカ人に対するスタインベックの強い憤りが理解できるのである。今から30年以上も前に、アメリカの歴史を回顧し、自然環境に対するアメリカ人一般の無責任さを痛烈に非難したこの言葉は、環境保護を訴える現代社会にも十分通用する内容を含んでおり、彼の先見の明には目を見張るものがある。

因に、『チャーリーとの旅』の中でも彼は“Bulldozers rolled up the green forests and heaped the resulting trash for burning... I wonder why progress

looks so much like destruction”⁷⁾と述べて、森林を破壊しての急激な都市の膨脹に憂慮の念を露にしている。しかし、同時に“I have never resisted change, even when it has been called progress”⁸⁾とも述べていることは看過できない。20世紀後半の時代にあつて、「発展」することが至上命令のごとく考えられているアメリカにあつては、自然と文明との調和ある「発展」は容易ではないと痛感せざるを得ない。だがいずれにしても、これらノンフィクションにおいてスタインベックは、まずはアメリカの先住民を含む自然環境に対して振った、自らの祖先たる移住民の冷酷な処置を批判的に総括している点をここで確認しておきたい。ある意味で、アメリカ人の傲慢な行動が自然及び社会の生態学的均衡を破壊してきたのである。

最後に、ノンフィクション的要素とフィクション的要素が露骨な形で混在している『エデンの東』(1952)に関してであるが、これについては別のところで詳細に論じたので、ここでは若干触れるに留めたい⁹⁾。この作品では、スタインベックは従来のステレオタイプ化した小説作法から大きく逸脱した創作スタイルを駆使して、作者自身が変幻自在に作中に入り出て物語の進行に介入したり、アメリカの歴史を一般大衆の視点から解説したりと、言わばポストモダンの方法を実験している。その中でも、同じく“we, our, us”という言葉を多用して、先住民の討伐や不毛の地への幽閉がかつて国是であったことを読者に了解させ、当時の一般大衆の認識の限界を自嘲気味に語っている。またカリフォルニアの地形を有効に活用している点も見逃せない。エデンの園とエデンの東という、それぞれ肥沃の地と不毛の地もどき場所を隣接させ、それぞれの住人に及ぼす影響が言わば逆転化現象を起こしていることを皮肉を込めて語っている。すなわち、エデンの東こそが現実の世界であつて、人間の関わり方次第でそれが地上の楽園にもなり得るのだということを示唆しているのである。

Ⅲ エコロジ意識の源流

これまで見てきたように、スタインベックのエコロジカルな視点からのアメ

リカ糾弾発言は40年代以降のノンフィクション（的）作品に多く見かけるのであるが、しかしその萌芽は彼がスタンフォード大学に在籍していた20年代前半にまで遡ることができる。当時彼が特に興味をもっていたのは文学と生物学であったと言われている。いずれは長編小説を書くことを夢見ながらも、当座は創作コースでミリーリーズ教授などから短編小説の効果的な書き方について非常に有益な指導・助言を受け、また「イングリッシュ・クラブ」という文学愛好者及び作家志望者たちとのクラブ活動を通じて文学の素養や創作の修行にさらに磨きをかけた。当時のスタインベックの読書量は相当なもので、主だった文学作品をほとんど読んでいたようである¹⁰⁾。また学資や生活費を賄うために肉体労働などを体験したことが下層階級の実態観察となり、それが後の作品の素材に繋がったことも、ここで付け加えておきたい。

一方生物学に対する興味は、当時アメリカ西海岸で注目を浴びていた生物学者のウィリアム・エマソン・リッターが唱えたスーパーオーガニズム（超生物体）の考え方に触発された感がある¹¹⁾。つまり、昆虫の個体が職能的に集合し、さらにその各集団が有機的に結合した一つの社会集団のことで、後のスタインベックのグループマン（ファランクス）理論——同目的の人間集団は個々の我意を超越したところで機能し、単なる頭数以上の力を発揮するというもの——の支えともなったものである。それは故郷のサリーナスや近隣のモンレーなど、幼い頃より慣れ親しんだ山や海の自然に対するスタインベックの共感なり共生本能とも符合するもので、このような境遇の中から彼独自の自然観及び人間観が培われたのであろう。

このような要素を盛り込んだ20年代の習作期の短編小説は大学新聞や雑誌などに掲載され、現在アメリカ各地の大学所蔵として保管されている。これらの中には出版には耐えない未熟なものもあるが、人物描写や自然描写などの面で後の傑作と称される作品を彷彿とさせる逸品も含まれており、稿を改めて論じてみたい。いずれにしても、スタインベックはこのような修行時代を経た結果、30年代の小説では自然を巧みに利用して、物語に広がりや深みをもたらすことに成功している。さらにこの描写方法は社会的に混乱していた当時のアメリカ

や、集団化したアメリカ人を描く上で有益な武器ともなったのである。

20年代の終わり頃から30年代の始めに苦勞して執筆し、やっと出版にこぎつけた『知られざる神に』(1933)という作品がある。これは19世紀から20世紀にかけての開拓期のアメリカを描いているにもかかわらず、動物の生け贄とか自然と人間との合一を希求する描写などが鮮烈なあまり、とかくスタインベックのアナクロニズムあるいは神秘主義として批判の対象にされがちである。だが彼の自然の描き方には、それだけでは片付けられない、現実感覚を備えたところがあることも忘れてはなるまい。それは舞台になっているカリフォルニアの豊かな自然と小雨による周期的な旱魃という地域的な特性を十分活かした描写内容からも推察できよう。従って、ここではワイアットの見解を支持したい。

California weather serves Steinbeck as an agent that suspends by destroying the author's uneasy experiment with domesticity. Home is broken up, and life returns to the road. Steinbeck has no doubt written here a novel about the tension between "imagination" and "place," but it is just as surely one in which the sedentary imagination is prevailed upon by the peripatetic. The difficulty of settled life in California will henceforth serve Steinbeck as a vehicle through which his deeply conflicted imagination explores the chances for happiness in any *place*.^{1 2)}

カリフォルニアという「場所」に特有の、強力な吸引力と反発力を秘めた自然に対し、スタインベックは独自の「想像力」を吹きかけて、人間の放浪と定住のせめぎ合いをフィクションの形で物語化したと言えよう。

この作品では、最終的に旱魃という気候が旅(主人公の死)を誘発する契機になるとすれば、水を湛えた緑地は一時的定住の誘因ともなっている。ここでは樹木が人々の定住願望の一端を担っていることは看過できない。主人公ジョゼフ・ウェインが入植した土地に聳える一本の大きな榎の木は彼の家族を守り、

慈しむ靈的存在として崇められている。また旱魃を逃れるために新たな放牧地の探索に向かった山の頂上で、ジョゼフは眼前に広がる未開のレッドウッドの森と彼の背後に横たわる死滅しかけた自分の土地とを何度も見比べる動作をする。登場人物が相反する世界の境界線上に佇んで逡巡する様はスタインベックの得意とする描写方法であるが、いずれを選択するかを決断に際して、自然の有り様がその判断材料になるのは興味深いことである。

そこで思い出すのは、スタインベックが住んだカリフォルニアの家々には必ずその家と密接な関わりをもち、彼の思考や感情教育に大きな影響を及ぼすような樹木が植わっていたことである。例えば『チャーリーとの旅』の中でも、彼はレッドウッドについては幼い頃から生活を共にしてきたと言い、この世における彼の存在期間をはるかに越えて太古の昔を知るレッドウッドに対して、畏敬の念や尊敬の気持ちを率直に述べている。そしてそれはそのような樹木をむやみに伐採することへの警告の言葉ともなっている。彼にとって一本の樹木を敬うことは森の緑を大切にすることであり、さらにそこに生息する動植物を含む自然すべてに暖かい眼差しを注ぐことに繋がっているのである。

『知られざる神に』の結末で、アンジェロ神父は“there might be a new Christ here in the West”¹³⁾と述べて、ジョゼフに現代のキリストを予感している。このことに関連してスタインベックは、この作品を執筆中のノートに、友人デュークに宛てて次のようなメモを残している。

This story has grown since I started it. From a novel about people, it has become a novel about the world. And you must never tell it. Let it be found out. The new eye is being opened here in the west—the new seeing. It is probable that no one will know it for two hundred years.... The story is a parable, Duke. The story of a race, growth and death. Each figure is a population, and the stones, the trees, the muscled mountains are the world—but not the world apart from man—the world *and* man—the one inseparable unit man plus his environment. Why they

should ever have been misunderstood as being separate I do not know.
Man is said to come out of his environment. ¹⁴⁾

世界と人間との一体感、環境の産物としての人間について、早くもこの時点で語っていることは注目に値するであろう。この文章と作品中の一文とを考え合わせれば、「西部の新しき目」あるいは「西部のキリスト」とは、人間が自然環境と不即不離の関係にあることを知り、しかもその地域の自然を熟知した上で冷静に判断し、その中から人々に生き抜く知恵を授ける人のことではないだろうか。ジョゼフの場合、確かに世界に対するこの「新たな見方」を得ることはできたが、残念なことにそれを他者に伝授すべく、自然の働きを冷静に受け止め、客観的に対処する方法を見出し得なかったのである。

以上のことから、『知られざる神に』に関わらず、カリフォルニアを舞台にした作品についてはベンソンの次の批評が的を得ているだろう。

The small California coastal valley seems to suggest to him a dramatic climax to the American Eden myth, a last chance for paradise at the end of the frontier. As a setting the small fertile valley establishes a microcosm wherein the interaction of man with earth, elements, plants, and animals can be intense, creating drama out of scene. And such a microcosm established a setting well fitted for Steinbeck's point of view which is often a God-like third person, an overview which looks down to examine successively one specimen after another in order to establish its place in the physical and social ecology. ¹⁵⁾

山々に囲まれたカリフォルニアの谷間は、フロンティアのはずれにあって最後に残された地上の楽園としての「エデン神話」の機能を付与されて、一つの小宇宙を形成している。そしてその中で人間と自然界との関わりがエコロジカルな視点から試されることになる。それはまさに、ワイアットも述べたように、アメリカ人がかつて共有した「西部の夢」の最終地であるカリフォルニアとい

う場所に対する作家による想像力の働きかけに他ならないであろう。

IV 『怒りのぶどう』における自然の意味

前章で検証したスタインベックのエコロジー意識の源流としての自然観を総括する上で、『怒りのぶどう』の考察は避けては通れないであろう。この作品は、直接的には30年代の農民たちのストライキを扱った小説『疑わしき戦い』（1936）の流れを汲むものであるが、巨視的に見れば砂嵐と洪水という自然災害が物語の最初と最後にそれぞれ配置されていて、その意味でカリフォルニアの自然を強く意識した先の『知られざる神に』の系譜に連なるものと見なすことができる。このような枠組みの中で、不況期のアメリカを舞台に、土地を奪われたオクラホマの小作農民たちが希望の地カリフォルニアを目指す旅物語の体裁を取っている。作品では、陸亀がその象徴となっている農民たちと、彼らを「同じアメリカ人」扱いしない非情な地主（農園主）たちという二項対立的な構図になっているが、安住の地への到達という同じ目的をもって集団化した農民たちはさながら超生物体としてのアリの集団に似ており、一方それを迎え撃つ農園主側は同じくハチの集団とも見なせよう。

ところでこの作品には、先住民が物語の進行に直接関与するシーンが一度だけ織り込まれている。ジョード一家が入居したカリフォルニアの国営キャンプにジュールというインディアンの血が混じった人物が先住していて、彼はキャンプ内の同じ移住農民たちと一致協力して、キャンプ潰しを図る農園主側の策謀を事前に粉碎するのである。仲間たちの間で活躍するジュールの姿が生き生きと描かれているし、またその後定住先を求めてキャンプを去るに際しても、仲間たちは彼に対して「同じアメリカの移住農民」としての連帯感を漂わせている。ここには、かつてのインディアンとしての悲劇は後方に引き下がり、今世紀30年代のアメリカ農民像が前面に押し出されており、その意味でジュールは一アメリカ人として実体を伴った現実の人物たり得ていると言えよう。

しかしこのように移住農民の惨状を訴えるこの30年代の物語は、見方次第で

はかつての開拓の歴史とも重なり、アメリカ人が先住民や自然に対して振ってきた暴挙を陰画の形で提示しているとも読めるのである。この作品では、作者によって移住農民たちは言わばそのようなアメリカの歴史を背負わされ、安住の地を求めて放浪の旅を続ける運命を担わされた象徴的存在と見なせるだろう。そしてその際、我々読者は作家の歴史観、自然観が物語の進行をリードしていることを察知することができる。以下では、中心人物たるジョード一家の行動を追うことで、自然がどのように彼らに働きかけているかを検討していきたい。

まず、次の一節が読者の注意を引く。

Grampa took up the land, and he had to kill the Indians and drive them away. And Pa was born here, and he killed weeds and snakes. Then a bad year came and he had to borrow a little money. An' we was born here. There in the door—our children born here. And Pa had to borrow money. The bank owned the land then, but we stayed and we got a little bit of what we raised....Sure, cried the tenant men, but it's our land. We measured it and broke it up. We were born on it, and we got killed on it, died on it. Even if it's no good, it's still ours. That's what makes it ours—being born on it, working it, dying on it. That makes ownership, not a paper with numbers on it.¹⁶⁾

これは5章の中間章に見られるところから、言わば当時のアメリカ農民一般の考えを述べたものと思われる。農民たちが苦勞して手に入れ、生活を営んできた土地が非情にも銀行に差し押さえられたことを糾弾する言葉である。問題なのは、先住民との戦いを雑草やヘビの駆除と同じレベルに扱っている彼らの発想であろう。まさに先住民は有害動物として除去すべき自然の一部なのである。従ってそのような力の論理が、回り回って農民自身の上に及んでも弁解の余地などないのであるが、彼らにはその意識が全く欠如しているのである。

こうして故郷を追われた農民たちはおんぼろトラックに乗って有無を言わず旅に駆り出されることになる。“The family met at the most important place, near the truck. The house was dead, and the fields were dead; but this truck was the active thing, the living principle...this was the new hearth, the living center of the family” (GW, 135-6) と、物語章（10章）で述べられているように、ジョード一家の唯一のより所は移動の手段であると同時に生活の糧ともなっているトラックであり、20世紀のアメリカ文化を代表する自動車が彼らに与えられた家なのである。定住先を求めて路上（旅）に送り出された彼らにとって、車はあくまで仮の住まいではあるものの、当面は生活の中心として最も大切な場所なのである。従って、それ以後、もはや父親の出番はなく、車の運転ができ、修理ができるトムやアルなど子供世代の時代になったことが解るであろう。

アメリカ開拓時代は馬車での時間をかけた移動であり、行く手にふさがる邪魔物を、手にした道具で取り除きながらの開拓であったものが、フロンティアの消滅した20世紀前半のアメリカは道路が整備され農地も整地されて近代化した社会へと変貌した。しかし、ジョードたちの行動には意外に過去の影がちらついていることが解る。例えば、彼らはオクラホマから数千キロに及ぶ苦難の旅を経て、やっと眼下にカリフォルニアの美しい人工の田園風景が見渡せる山の頂上にたどり着く。そこで“A rattlesnake crawled across the road and Tom hit it and broke it and left it squirming....And the truck rolled down the mountain into the great valley” (GW, 314) とあるように、トムは意図的にヘビをひき殺すという、一見不必要な行為に及んでいる。これは、地上の楽園を思わせる“great valley”に入って新たなスタートを切るに際して、ヘビにまつわる忌まわしい聖書のイメージを払拭しようとした、言わば清めの儀式と言えよう。そしてそこに、開拓期の「敵」としての自然環境がトムの記憶にインプットされていて、そのような環境を排除しようとする無意識的行為も含まれていると取るのは読み込み過ぎであろうか。

手入れの行き届いた農地には果物がたわわに実っているが、移住農民たちは

そこに落ち着くことは許されない。収穫が終われば再び路上生活に追いやられる身なのである。そのような彼らの気晴らしは同じ仲間とのひとときの語りである。

They was a brave on a ridge, against the sun. Knowed he stood out. Spread his arms an' stood... Ever see a cock pheasant, stiff and beautiful, ever' feather drawed an' painted, an' even his eyes drawed in pretty? An' bang! You pick him up—bloody an' twisted, an' you spoiled somepin better'n you; an' eatin' him don't never make it up to you, 'cause you spoiled somepin in yaself, an' you can't never fix it up.

And the people nodded, and perhaps the fire spurted a little light and showed their eyes looking in on themselves.

Against the sun, with his arms out. An' he looked big— as God.
(GW, 445)

話は西部開拓時代のインディアン戦士との戦いの場面であるが、人々は神のごとき勇姿をした戦士の射殺をキジ狩りと同列に扱っている。これは必ずしも開拓民たちの力を賛美するものではない。というのも、「それらの喪失は自分自身の大切な一部を台なしにして修復できなくすることだ」と嘆いていることから推測できるように、作者は「そのような生き物の住む自然をむやみに破壊すれば、その影響はいずれ自分に跳ね返ってくる」と言いたいのではないだろうか。

そこで思い出されるのが自然による人間への報復とも見なせるシーンであろう。

The muddy water whirled along the bank sides and crept up the banks until at last it spilled over, into the fields, into the orchards, into the cotton patches where the black stems stood. Level fields became lakes,

broad and gray, and the rain whipped up the surfaces.... And the people waded away, carrying their wet blankets in their arms. They splashed along, carrying the children, carrying the very old, in their arms. And if a barn stood on high ground, it was filled with people, shivering and hopeless. (GW, 589-90)

中間章(29章)の一場面である。人間の営為を消し去るかのよう、豪雨がカリフォルニアの農地を襲って作物を全滅させてしまうのである。大洪水はそれまでの人間同士の確執など全く意に介さず、一切を洗い流し、水没させてしまう。農民たちは震えながら、絶望的な気持ちで、歩いて高台に避難するしかない。まさに自然の猛威に人間が翻弄され、人間の無力さを痛感させるものである。これと類似したシーンは最終章の物語章(30章)でも再現されている。

They (the Joads) stood on the highway and looked back over the sheet of water, the dark red blocks of the cars, the trucks and automobiles deep in the slowly moving water.... Ma searched the land and the flooded fields. Far off the road, on the left, on a slight rolling hill a rain-blackened barn stood. "Look!" Ma said. "Look there! I bet it's dry in that barn. Let's go there till the rain stops." (GW, 614-5)

ジョード一家も道路を徒歩で避難する。先程まで仮の住まいであった有蓋貨車や彼らにとって生命線とも言えるトラックが水浸しになっている様子を一度振り返った後、再び前を向いて歩き始める。はるか前方の高台に雨宿りのできそうな一軒の納屋が立っている。疲れ切った彼らは、そこにほんのひととき体を休めることだけを考えているのであって、今後の予定も希望すらも全く持ち合わせてはいない。ただ読者には、彼らは雨が止めば再び腰の落ち着ける場所を求めて旅に出るであろうことは推察できるのである。作者は意図的にこの旅を永続させる中でアメリカの歴史を検証し、今後アメリカが進むべき方向を模索

しようとしているのだから。オクラホマの砂嵐に端を発したこの旅物語はカリフォルニアでの大洪水でその幕を下ろすことになるが、安住の地を求める人々の現実の旅は物語を超えて続くのである。

お わ り に

以上、スタインベックによってエコロジーの光を当てられたアメリカ（人）について検証してみた。スタインベックの自然観及びエコロジーに対する意識は20年代の作家修行時代を含めて彼の故郷カリフォルニアの自然にあることを踏まえて、その自然描写を中心に30年代から60年代に至る主要作品を考察してみたわけである。

30年代の小説では、人間の「楽園」探求を一つのテーマとして物語化する中で、人間（アメリカ人）の過去の傲慢とも言える行為を「生き延びた」怒れる自然、逆襲する自然の猛威を描いて見せた。そして40年代以降では、作者自らがアメリカ大陸破壊の歴史に言及し、エコロジカルな意識をもつことの大切さを明確に示している。このように、フィクション、ノンフィクションの相違はあっても、人間の自分中心の考え方に対する彼の批判精神は最初から一貫して流れており、その表現方法の一つとしてカリフォルニアの自然及びその地の特性を最大限に活用したのである。このような意味からも、エコロジーに対する意識が高まっている現在、スタインベックはその先駆者の一人として再評価される価値が十分あるように思われる。

注

- 1) スタインベックの全体像を捉えようとする本論の性格上、個別の作品論において既に論じた内容を一部重複して取り上げていることを初めにお断りしておきたい。
- 2) Edmund Wilson, *Classics and Commercials: A Literary Chronicle of the*

- Forties* (New York: The Noonday Press, 1967), pp.36-38.
- 3) Louis Owens, *The Grapes of Wrath: Trouble in the Promised Land* (Boston: Twayne Publishers, 1989), pp.73-74.
 - 4) John Steinbeck, *The Log from the "Sea of Cortez"* (New York: The Viking Press, 1971), p.3. なお、本論の内容から言って、『コルテスの海』の考察は欠かさないところであるが、別のところで詳細に論じたのでここでは簡単に触れるに留めたい。詳しくは拙論「スタインベックとリケッツの関係 (1)」(大分大学経済論集第36巻第4号, 1985年1月発行)を参照されたい。
 - 5) John Steinbeck, *America and Americans*, in *The Complete Works of John Steinbeck*, Vol. XVI, ed. Yasuo Hashiguchi (Kyoto: Rinsen Book Co., 1985), p.18.
 - 6) *Ibid.*, p.127.
 - 7) John Steinbeck, *Travels with Charley: In Search of America* (New York: The Viking Press, 1973), p.162.
 - 8) *Ibid.*, p.173.
 - 9) 詳しくは拙論『『エデンの東』再考』(愛媛大学教養部紀要 第27号, 1994年12月発行)を参照されたい。
 - 10) Jay Parini, *John Steinbeck: A Biography* (London: Heinemann, 1994), p.50. なお、スタインベックの読書内容に関する詳細な研究書としてはRobert J. DeMott, *Steinbeck's Reading: A Catalogue of Books Owned and Borrowed* (New York: Garland Publishing, Inc., 1984) がすぐれている。
 - 11) Richard Astro, "Steinbeck's *Sea of Cortez*," in *A Study Guide to Steinbeck: A Handbook to his Major Works*, ed. Tetsumaro Hayashi (Metuchen, N.J.: The Scarecrow Press, Inc., 1974), p.168.
 - 12) David Wyatt, *The Fall into Eden: Landscape and Imagination in California* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986), p.135.
 - 13) John Steinbeck, *To a God Unknown* (London: Heinemann, 1973), pp.203-4.
 - 14) Nelson Valjean, *John Steinbeck: The Errant Knight* (San Francisco:

Chronicle Books, 1975), pp.122-3.

- 15) Jackson J.Benson, “ Environment as Meaning: John Steinbeck and the Great Central Valley ” in *Steinbeck Quarterly* (Muncie, Indiana: The Steinbeck Society of America, Vol. X, No. 1, Winter 1977), p.13.
- 16) John Steinbeck, *The Grapes of Wrath* (New York: The Viking Press, 1978), p.45. 以下、この作品からの引用は引用文に続けて、GWの略語とともに括弧内に頁数を示す。